

『あの子の宿題』

作 大迫 旭洋

教室。

机と椅子と、黒板がある。

開演時間。

暗闇の中から、「仰げば尊し」が聞こえてくる。

(以下、歌の途中から、)

君島

あの日、あの時、僕たちは中学生でした。

もう、戻れないけど。

あの日、あの時、僕たちは中学生でした。

初めて制服を着て、

初めて部活に入って、

初めての恋をしました。

もしも。

もしも、あの時に戻れるとしたら。

あなたは戻りたいですか？

僕は、戻りたいです。

あの子がいたから。

今はもういない、あの子がいたから。

何度でもやり直したい。

もう、戻れないけど。

だから、せめて、心の中で描きます。

あの日、あの時のことを。

■中学三年生、五月

チャイムの音。

片岡 起立、気をつけ、礼

生徒たち おはようございます！

片岡 着席

教室の光景。

星川 はー、眠っ……

倉木 ねえ、数学の宿題やった？

片岡 当然

倉木 え、ちょっと見せて

片岡 嫌だよ、自分でやれ

倉木 そんなこと言わずにさ

片岡 星川は？

星川 もちろん

倉木 やば、私だけじゃん
星川 まあ、やったんだけどね、
片岡 ん？
星川 家に忘れた
片岡 何だそれ
倉木 本当に？
倉木 うん、本当本当
佐藤 (黒板消しクリーナーの音) ブイーン
倉木 や、絶対嘘でしょ
星川 本当だって
佐藤 ブイーン
片岡 じゃあ、どんな問題あったか覚えてる？
星川 えーと
片岡 5、4、3、
星川 ちよ、ちよっと待って
片岡 2、1
星川 三角形の
片岡 はい、アウトー！
倉木 やってないな
星川 や、本当にやったんだって！
佐藤 ブイーン
片岡 じゃさ、家に帰って取ってこいよ
星川 取ってきたいけどねえ
片岡 は？

星川 遠いんですよ、家が
片岡 お前、正直に言え
星川 本当、本当に
倉木 片岡お願い！見して！
片岡 嫌だって言ってるんだろ
倉木 一生のお願い！
片岡 何回使ってるんだ、一生のお願い
倉木 今回は本当に！
片岡 めっちゃ怖いじゃん、細川
片岡 そんなに困ってるんならさ
倉木 ん？
片岡 君島に聞いてみれば？
倉木 もー
片岡 ほらほら
倉木 またすぐ意地悪言うー
片岡 や、別に意地悪じゃねえじゃん
君島 な、君島？
君島 ……
星川 寝てんのかな？
片岡 さあ
先生、やってきて
先生 はい、席つけー

生徒たち はーい

先生 えー、今日は、嬉しいお知らせがある。

何と、このクラスに、転校生がやってくる！

生徒たち ええ！

先生 はい、入ってきなさい

あの子 失礼します

あの子が、教室に入ってくる。

あの子 ……はじめまして、

えっと、このクラスに、転校することになりました、

君島 その声が、その唇から生まれる声が、

美しいと思った。

あの子 とても、緊張していますが、

君島 それが、僕の初恋だった。

あの子 よろしく、お願いします

一同、拍手。

あの子 ありがとうございます

先生 それじゃあ、空いている席に

あの子 はい

君島 この生き物は、このきれいな生き物は、

一体どこからきたんだろう。

朝。

母親 起きなさい

あの子 ううう

母親 ちょっと、遅刻するわよ

あの子 分かった分かった

君島 あの子は布団の中で、大きく伸びをする。

あの子 んんー

君島 そして、朝の支度が始まる。

あの子 おかあさん

母親 なに？

あの子 タオルどこー？

母親 干してるの使いなさい

あの子 はい

君島 今日は寒いから、あの子は熱めのシャワーを浴びる。

その間に、お母さんは慣れた手つきで、布団を片付ける。

無駄がない動き。どんどん家事は進む。

あの子がお風呂から上がったときにはもう、

食卓は、朝の光景。

食卓に並ぶ二人。

母親 お待たせ

あの子 ありがとう、いただきます

母親 はーい

君島 食パン。牛乳。ツナのサラダ。ベーコンエッグ。あと、

あの子 ジャムは？

母親 ごめん、切れてる

あの子 えー

母親 バター使いなさい、バター

あの子 ん

君島 ……たぶん、そう。多分そうだと思います。知らないけど。

あの子 じゃ、いつてきまーす

母親 行ってらっしゃい

君島 そして、あの子は学校にやってくる。

新しい一日が始まる。

あの子を取り囲む、みんな。

倉木 ねーねー

あの子 はい？

倉木 どこから転校してきたの？

あの子 えっと、

倉木 うん

あの子 九州から

倉木 九州！？

星川 遠いね

片岡 九州のどこ？

あの子 大分

三人 あー

星川 大分ねえ

倉木 大分かあ

片岡 大分って、あれだよ？

あの子 うん？

片岡 温泉？

あの子 あ、うん、そうそう、温泉

片岡 だよ

あの子 あとは、唐揚げ、とか

倉木 え、唐揚げが有名なの？

あの子 うん、一応

倉木 へー

星川 俺、唐揚げ、大好き

片岡 聞いてねえわ

あの子 あはは

佐藤 ブイーン

倉木 でも、温泉、めっちゃ分かる

あの子 え？

倉木 肌、すごいキレイだもん

あの子 え、そう？

倉木 うん

片岡 確かに、めっちゃキレイだよ

星川 うんうん

あの子 え、初めて言われた

倉木 本当にー？

あの子 うん

片岡 じゃあ大分の人、どんだけキレイなんだよ

星川 確かに

佐藤 ブイーン

片岡 俺、大分行きてえ

星川 俺も

片岡 大分に住みてえ

倉木 大げさ

あの子 もし行くときは、教えて？

片岡 え？

あの子 良いところ、紹介するから

片岡 おお、うん

倉木 良いなあ、温泉

星川 うん

倉木 うらやましい

黒板に文字。 【あの子は、きれい。】

倉木 うらやましい。

ため息みたいに出てきた言葉が、
どんどん憎たらしくなってきた。

多分、その、うらやましい、と言う言葉は、
温泉じゃなく、あの子のことだったから。
ずるい。

私だって、うらやましいと思われない。

そんなことを思ってた、が、

なんと、びっくりするものが起きました。

私、倉木は、なんと、

片岡と付き合うことになったんです。

■中学三年生、七月

ある日の放課後。

倉木 片岡ー

片岡 おお

倉木 一緒帰ろ

片岡 はいはい

二人、少し歩いて

倉木 んふふー

片岡 え？

倉木 やって見たかったんだ、こういうの

片岡 ああ、一緒に帰る、みたいなの？

倉木 そーそー

片岡 ああねえ

倉木 え、テンション低くない？

片岡 んなことねーけど

倉木 嫌？

片岡 え？

倉木 嫌なんか

片岡 や

二人 んなことねーけどお

片岡 ……

倉木 んなことねーけど率、高いね

片岡 やめろ

倉木 ん

しばし、無言。

倉木 片岡ってさあ、

片岡 あ？

倉木 意外と照れ屋？

片岡 ……

倉木 だよねえ

片岡 うっせ

倉木 そうなんだよねえ……

片岡 何笑ってんの？

倉木 や、なんかね

片岡 ん？

倉木 なんか、嬉しくて

片岡 はあ

倉木 やー、増えてくんだなあ

片岡 え？

倉木 知らない片岡が

片岡 なんだそれ

倉木 あ、最初に言っとくわ

片岡 ん？

倉木 嫌いになったら、すぐ言ってね？

片岡 ……

倉木 あと、他に好きな人が、出来ても

片岡 はあ

倉木 約束

片岡 まあ、うん

倉木 てか、私、多分分かるし、そんなとき

片岡 ねーよ

倉木 え？

片岡 そんなん、ねーよ

倉木 ……ちよ、もう一回、言っつて？

片岡 だから、

倉木 え？

片岡 や、もういい

倉木 えー??

片岡 んだよ、帰っぞ

倉木 待ってよ

笑う倉木。逃げるように歩く片岡。

それを見ている、君島。

君島 ……青春ですね。

いいなあ。フアック。

あ、すみません、汚い言葉が出ちゃいました。

まあ、でも、しょうがないっすよね。

自分、全然馴染めてないんで。

悪い意味で浮いちゃってるんで、はい。

時々思います。

もっと僕が明るくて、イケメンだったら、

世界が変わってたのかなあ、って。

そんな妄想を詰め込んで、

一人の人間を作ってみました。

紹介します、タケルくんです。どーぞ。

タケル、登場。

タケル ちーっす

君島 パツキン！いきなりのパツキン！

ここ中学だぞ

タケル え、もしかして、俺のこと見てる？

君島 いいねー、良い自意識だよ

タケル あー、全然前髪決まんねえ

君島 トイレでよく見るやつ！

イケメンのみに許された権限！

タケル よっしや、しゅっぱーっ！

君島 意味分かん！もはや意味わからん！

もう、最高ですね。

絶対こんな人間にはなれっこないから、

憧れてしまう自分、もいます。

だってタケルは、

あの子にも気軽に話しかけられる。

あの子と話すタケル。

タケル よっ

あの子 え？

タケル 初めまして

あの子 誰ですか？

タケル タケルって言います、よろしくー

あの子 はあ

タケル 細いなあ、自分、

ちゃんとメシ食ってる？

あの子

……

タケル メシ、食ってんのかって

あの子 何ですか？

タケル ん？

あの子 さつきからあなた、失礼ですよ

タケル え、もしかして、気悪くした？

あの子 はい

タケル それはそれは、すみま千手観音

間。
あの子、笑う。

あの子 あはははは

タケル お、笑った

あの子 馬鹿ですね、あなた

タケル うん、馬鹿なの、ありがとう

あの子 いえいえ

タケル 笑った方が可愛いで、自分

あの子 私？

タケル うん

あの子 そっかあ

タケル 知らなかった？

あの子 ううん、知ってた

タケル わ、性格悪っ

あの子 うるさいなー

タケル や、めっちゃ面白いわ

あの子 私？

タケル うん

あの子 それは、知らなかったなあ

タケル もったいない

あの子 もったいない？

タケル めっちゃ面白いで、自分

あの子 そう？

タケル うん、俺が保証する

あの子 ありがとう

タケル いえいえ

あの子 タケルくん、だっけ？

タケル そうそう、タケル

あの子 また会おうね

タケル おお、それじゃあ、また

あの子 ばいばい

タケル うん

黒板に文字。 【あの子は、意外とよく笑う。】

タケル どうも、タケルです。

俺を作った人の名前は、君島って言います。

君島は、すげえ人見知りで。

つか、プライドが高くて、傷つきたくないから、
なるだけ人と関わらへんように生きてます。
多分、どの教室にも、一人はいるタイプの人間。
特別に憧れる、普通の人間。
だから、俺が生まれました。
満たされない青春を満たすために。
さて、時は流れて、夏。
夏休みの登校日の、一日。

■中学三年生、八月

みんな、体操服を着ている。

ラジオ体操の音楽。

みんな、それぞれのペースで、体操する。

ラジオ体操、二番まで終わり、

先生 はい、おはようございまーす

生徒たち おはようございまーす

先生 元気ですかー？

生徒たち 元気でーす

先生 えー、実は、もうすることがありません！

解散！

生徒たち よっしゃ！

片岡 帰る帰る！

先生 帰らないよーに

倉木 えー

先生 授業が終わるまではここを出ないよーに

片岡 何でだよ

星川 先生、暇でーす

倉木 ゲームでもしません？

先生 ゲーム、するか

倉木 やった！

片岡 何します？

先生 しっぱ取り鬼

生徒たち (それぞれ反応)

先生 はい、じゃあしっぱ配るぞ

君島 タケル

タケル 呼んだ？

君島 ヘルプ！

タケル はいよ

しっぱが配られて、

先生 それじゃあ行くぞ、スタート！

ホイッスル。

しっぱ取り鬼、開始。

本気で戦い、

その日の勝者が決まる。

先生 優勝は〇〇、拍手！

勝者 ありがとうございます！

黒板に文字。 【あの子は、負けず嫌い。】

佐藤 鬼ごっこの間。

私は、あの子のを見てました。

あの子には嘘がない。

心の中の感情が、そのまま出てくる。

嬉しいときに嬉しいと、

悔しいときに悔しいと、言える人。

いいなあ。

私は、あの子になりたい。

あの子みたいに、になりたい。

■ 中学三年生、十月

星川 十月と言えば、運動会っすよね。

楽しい楽しい運動会がやってきます。

え、その体型で言うなって？

バカ野郎、確かに運動はからっきしだよ。

だけど、あれがあるじゃねえか。

俺みたいなヤツが、女子と触れ合う貴重な機会。

フォークダンス。

オクラホマ・ミキサーが流れる。

替え歌を歌う星川。

星川 さあ フォークダンスが始まるよ

君と両手を繋いだら

伝わる呼吸と僕の皮膚

嫌な思いさせたらごめんなさい

それでも僕は生きている

あの子までもうすぐ あの子までもうすぐ

あともう少し お辞儀をしてから次の人

誰も彼もが踊ってる

思春期盛りの オスとメス

考えてくれたの誰だろう

心から感謝を伝えたい

あの子がもうそこに あの子がもうそこに

このもう次は 憧れていたあの子です

曲、終わり、マイムマイムに。

あの子と手を繋げなかった星川の叫び。

星川

え、ちよつ、ちよ、あ、

……なんでだよー!! 何でなんだよー!!

あとちよつとだったのに!

あの子まで、もうちよつとだったのに!

やめろやめろ、踊るのやめろ、

全然愉快じゃない、全然愉快じゃない!

思ってたのと違う! 違う!

練習したのに! セっかく練習してきたのに!

触れ合いたかった!

触れ合いたかったよー! わーん!

くそ、だから、何踊ってんだ、

マイムマイムじゃねえよ、くそ!!

馬鹿にしてんのか、お前ら!

わ、もう、もう、うるさい、うるさい!

人が喋ってるでしょうが!!

やるか、おお? くそ、くそくそ!

みんなで馬鹿にしゃがってよ、何だよ、

期待したのに! 想像してしまったのに!

のののの!

のにはっかりの人生! もう嫌だ!

やめろやめろやめろー!

一度っきりの青春を返せー!!

愉快的なマイムマイム、続く。

君島

これで、午前の部のプログラムは、全て終了です。

今から、昼食の時間です。

午後のプログラムは、一時三十五分から、始まります。

お弁当の時間。

母親

おい、こっちで

あの子

お母さん

母親

よく頑張ったなあ

あの子

ううん

母親

お弁当作ってたけん、食べよ

あの子

ありがとう、いただきまーす

母親

どう?

あの子

唐揚げ、美味しい

母親

本当?

あの子

うん

母親

昨日から漬け込んだけんなあ

あの子

さすが

母親

ふふ、ありがとう

あの子

もう一個食べていい?

母親

何個でも、どうぞ

あの子 やった

黒板に文字。【あの子は、からあげが好き。】

母親 運動会の日のお弁当。

あの子のために、心を込めて作りました。

一年に一度のご馳走です。

私のお母さんも頑張っちゃったなあ。

あんたもいつか、お母さんになるのかな。

そして、また、私みたいに、

子どもにお弁当を、作ってあげるのかな。

そこに、倉木がやってきて、

倉木 ねー

あの子 あ、倉木さん

倉木 もうご飯食べた？

あの子 あ、もうちょっと

倉木 終わったらさ、一緒遊ぼう

あの子 うん、分かった

倉木 待ってるね

あの子 はい

母親 友達なん？

あの子 うん、倉木さん

母親 良い子そうやなあ

あの子 よく遊ぶんよ

母親 そう

あの子 うん、それじゃあ

母親 もう行くん？

あの子 お弁当ありがとう、美味しかった

母親 行かんで

あの子 え？

母親 ……

あの子 どうしたの、お母さん？

母親 ……

あの子 もう行かんと、ね？

母親 そうやな

あの子 うん

母親 行ってらっしゃい

あの子 行ってきます

あの子が、行く。

母親 あの子がまだ、小学生るとき。

私にこう言ってきたことがあります。

「お母さん、お母さん」

「喜んだらな、その分だけ、あとで悲しいんで」

それ聞いて、私、何にも言えなくて

「馬鹿やなあ」って誤魔化したんですけど、
あの日、私はなんち言えば良かったんか、
時々考えます。

■中学三年生、十一月

先生を取り囲む、みんな。

片岡 先生の初恋っていつですか？
先生 な、なんだ急に
片岡 や、気になって
倉木 私も気になるー
星川 俺も
先生 そうか？
倉木 え、いつごろですか？
先生 えー、確か、
お前たちと同じ歳くらいだったかな
星川 わ
片岡 ひゆう
倉木 告白しました？
先生 したよ
星川 わわ
片岡 ひゆうひゆう

先生 面白いか？ この話

倉木 はい

片岡 え、どんな感じだったんですか？

先生 電話で

倉木 電話かあ

先生 や、でも当時は、家の電話しかなかったからな、

めちゃくちゃ緊張したぞ

星川 おお

先生 やつとの思いで、電話番号聞いて、

「六時半に電話しますから！」って伝えて

震える手で、電話をかけたんだ

黒電話の音。回想。

あの子 もしもし

先生 あ、もしもし

あの子 安藤、くん？

先生 ん、そうそう、安藤安藤

ごめんね、電話して

あの子 ううん

先生 そっちは？ 大丈夫？

あの子 うん、ちよつとなら

先生 良かった

あの子 で、話って？

先生 えっとね
あの子 うん
先生 ちょっと、伝えたいことがあって
あの子 私に？
先生 そう、あなたに
あの子 そうなんだ
先生 うん、そうなんだよ
あの子 それって
先生 うん
あの子 何？
先生 ……実は、俺
あの子 うん
先生 ずっと、あなたのことが
母 (掃除機の音) ブイーン
先生 ちょっと、お母さん！
あの子 何？
母 ブイーン
先生 掃除機やめて
母 ブイーン
先生 掃除機やめて！
母 あんたホコリはどうするんね
先生 今じゃなくていいだろ！
あの子 安藤くん？
先生 あ、ごめん、ごめんね

母 何、女？
先生 うるさいな！
あの子 ごめん、お父さん来た
先生 え？
あの子 切るね、おやすみー
先生 ちょ、ちょっと
ツーツーという音。
佐藤 (黒板消しクリーナーの音) ブイーン
星川 告白、できてないじゃないっすか
先生 ほぼ、告白だろ
片岡 いやいや
倉木 それだけ？
先生 それだけ、良い思い出
星川 そっかあ
佐藤 先生
先生 うん？
佐藤 そろそろ、合唱の練習を始めても良いですか？
先生 ああ、そうだったな
佐藤 すみません
先生 いや
佐藤 合唱の練習を始めます！ 集まってください！
片岡 あ、ごめん、佐藤

佐藤 はい？

片岡 俺、このあと、部活

佐藤 だから？

片岡 や、ちょっと、練習には

佐藤 駄目です

片岡 は？

佐藤 私、言いましたよね？

休むときは、あらかじめ連絡くださいって

片岡 ……

佐藤 なので、認められません

片岡 ちっ

先生 ほら、やるぞ

片岡 あいつ、あんなキャラだったっけ？

星川 ううん

佐藤 じゃあ、列になってください
音取ります、んー、んー、んー

黒板に文字。 【あの子は、素敵な声。】

佐藤 お願いします

先生 いち、に、はい！

歌。

素晴らしい愛をもう一度。

合唱、終わり、

片岡 これでいいですか？

先生 佐藤

佐藤 はい

先生 ん、お疲れ様でしたー

生徒たち お疲れ様でしたー

各自、机を片付けながら、

先生 また明日な

生徒たち はい

倉木 さよならー

片岡 さ、行こうぜ

星川 うん

■中学三年生、一月

星川 あれ、おかしいな

片岡 どした？

星川 や、教室のドアが、開かないんだよ

倉木 いやいや

星川 や、本当に

片岡 どれ

ドア、開かない。

片岡 マジか

星川 ね？

君島 タケル、いるか？

タケル いますよー

君島 よし

倉木 え、何？ 帰れないじゃん

あの子 どうしよう

星川 や、ただ立て付けが悪いだけでしょ

片岡 ふん！ 駄目だ

倉木 え、やばくない？

あの子 誰かいないかな？

倉木 すみませーん！

どこからか、砂嵐の音。

そして、ゲームマスターの声。

先生 おはよう、三年二組の諸君

倉木 え？

星川 何だあ？

先生 私は、ゲームマスター。

今から、ゲームを始めようじゃないか

命をかけた、ゲームをね

ふざけんじゃねえぞ！

ふふふ、冗談かどうかは、調べてみれば分かることだ

ああ！？

あの子 ねえ、気づいた？

ああ、この教室から、窓が消えてる

何？

星川 本当、だ

先生 ふたり

全員 ……

先生 この部屋から、生きて帰れるのは、二人だけ

片岡 は？

倉木 そんな…

先生 そしてお前たちの中には、一人、殺人鬼が混ざっている

全員 ……

星川 うそ、だろ？

先生 おやおや、気が早い殺人鬼は、もう動いたようだな

片岡 はあ？ 何言ってるんだよ、さっきから…

佐藤、ばたりと倒れる。

星川 ……え？

倉木 きゃあああああ！

あの子 佐藤、さん？

タケル ダメだ

片岡 何？

タケル 死んでる

星川 そ、そんな……

先生 (笑っている)

倉木 な、何なのよ、これえ！

先生 それでは、ゲームを始めよう

片岡 くそっ……！

先生 ゲーム、スタート

互いに顔を見合う五人。

タケルと君島以外の時間が止まって、

タケル ちょ、ちょっと待って

君島 ん？

タケル 何なの、これ

君島 デスゲームですけど？

タケル デスゲーム

君島 うん、バトルロワイアルみたいな

タケル ああ

君島 うん

タケル ……え？

君島 ん？

タケル あ、もしかして書いてるやつ？

君島 そうそう、新作

タケル なるほどね

君島 面白くない？

タケル え、このあとどうなんの？

君島 とりあえず、タケルと、あの子と、片岡以外みんな死ぬ

それ以外、ばたりとその場に倒れ、

タケル ええっ？

君島 (倒れたまま) あ、ちなみに、片岡が殺人鬼ね

片岡 殺す……！

タケル ちよっと！

君島 頑張れ、あの子を守ってみせろ！

タケル 何だよ、もー

タケルと片岡の戦い。

あの子 タケル！

タケル やめろ、俺は別に争いたくねえ！

片岡 そうもいかないんだよっ！

あの子 片岡くん！

片岡 俺だって、条件は一緒なんだよ、

生きるためには、何かを犠牲にしなきゃいけないんだ！

タケル　　ぐっ
あの子　　タケル！
先生　　はっはっは！いい！いいね、君たち！
もつと血を見せろ！
もつと私を！興奮させてみる！
タケル　　悪趣味なヤローだ
あの子　　大丈夫？
タケル　　近づくんじゃない？
男2　　今は、男同士の真剣勝負。だよな？
違えねえ
あの子　　私に、出来ることは？
タケル　　お前はただ、信じてくれ
俺と一緒に生き残る未来をよ……
あの子　　タケル
片岡　　なあ
タケル　　ん？
片岡　　次で、終わりにしないか？
タケル　　……そうだな
片岡　　人間五十年　下天のうちをくらぶれば
タケル　　夢幻のごとくなり
片岡　　一度生を受け
タケル　　滅せぬもののあるべきか
片岡　　いざ、尋常に
二人　　勝負！

君島、起き上がり、
君島　　ここまでしか書いてないんだよね
タケル　　そっか
役者のように帰ってゆくみんな。
君島　　どうもありがとうございましたー
倉木　　いえいえ
君島　　参考になりましたー
タケル　　な、な
君島　　ん？
タケル　　もうすぐ、高校受験やろ？
君島　　まあ
タケル　　勉強せんでええの？
君島　　これが勉強
タケル　　え？
君島　　小説家になりたいの
タケル　　まあ、そっか
君島　　だから、誰よりも本読んで、誰よりも面白くなる
タケル　　おお
君島　　頑張りまーす
タケル　　頑張り！

と、そこに、あの子が来て、

あの子 君島くん？

君島 あ

あの子 やっぱり、君島くんだ

君島 あ、ああ

あの子 図書館、よく来るの？

君島 (うなずく)

あの子 そっか

間。

君島、タケルを見る。

タケル、目を合わさない。

あの子 ね、

君島 うん？

あの子 オススメの本、ある？

君島 本？

あの子 うん、今探してるんだよねー

君島 ど、どんな本？

あの子 うーん

君島 ジャンルは？

あの子 ファンタジー

君島 ファンタジー、か

あの子 のめり込むような、本読みたい

君島 指輪物語は？

あの子 トールキン？

君島 そうそう

あの子 大好き

君島 あ、そうなんだ

あの子 読んだことある？

君島 もちろん

あの子 えー！ すっごく嬉しい！

君島 あ

あの子 読んでる人、私の周りにいないから

君島 よ、よく読んだ？

あの子 本？

君島 ん

あの子 結構、読む方かなあ、君島くんは？

君島 それなりに

あの子 え、じゃあさ、

君島 うん？

あの子 今度一緒に、図書館行こうよ

君島 え

あの子 学校のじゃなくて、街のやつ

君島 いやいや

あの子 嫌？

君島 あ、いや、嫌じゃなくて
あの子 うん？
君島 行こう、か
あの子 やった！
君島 ふは
あの子 土曜日とか、どうか
君島 了解
あの子 ありがとう、助かる！
君島 いえいえ
あの子 それじゃあ、またね

黒板に文字。【あの子は、本をよく読む。】

タケル (君島を見て) 震えてる震えてる
君島 どうしよ
タケル おお
君島 とんでもないことになった
タケル なったな
君島 うん
タケル やったな
君島 いや、無理無理無理無理……
タケル 大丈夫だよ
君島 大丈夫か？
タケル 大丈夫にしる

君島 おお
タケル 練習、いくらでも付き合ってる
君島 ありがとう
タケル うん

一人になる、君島。

君島 いろんなことを考えた。
いろんなことが考えられなくなった。
何を話そう。大丈夫かな。笑ってくれるかな。
満足してくれるかな。迷惑じゃないかな。
いっそ死にたい。猫になりたい。
本、調べなきゃ。ファンタジー。国内？海外？
のめり込むような本。
探そう、聞いてみよう。
ほとんどん時間が過ぎる。
もし。
もし、僕が僕の夢の話をしたら。
あの子はどんな顔をするんだろうか。
やめよう、考えるな、期待するな。
あの子に、ぴったりの本を探す。
僕に出来ることは、ただそれだけ。
だけど、出来れば、
あの子の人生を変えてしまおうくらいの、

本を紹介したい。

そしたら、あの子は、その本を買う。

読むたびに、ちょっとだけ、僕のことを思い出す。

そんな本がいい。

一番調べた。一番人生で努力した。

そして土曜日。

あの子は、来なかった。

待ち合わせ場所で、僕は、夕方まで待った。

それでも来なかった。

というか、消えた。

その日を境に、あの子は、姿を消した。

今も見つかっていない。

一人足りないまま、僕たちは卒業した。

それから、十五年が経つ。

暗転。

十五年の年月が流れる。

■十五年後

母親の家を訪れる先生。

先生 失礼します

母親 こんにちは

先生 はい

母親 すみません、お忙しいなか

先生 いえいえ

母親 喉、渴いてます？

先生 あ、大丈夫ですよ

母親 そんなこと言わんで

先生 あ、じゃあ、お言葉に甘えて

母親 はい

先生 すみません

母親 ビールにしますか？

先生 あ、この後が、

母親 仕事ありますよね、すみません

先生 いえいえ

母親 じゃあ、お茶を

先生 ありがとうございます

母親 ちょっと、待っちゃってください

間。

先生 あの、お母さん
母親 はい？

先生 その、ご相談というのは、
母親 今にします？

先生 はい？

母親 もう少し、後にしません？

先生 そう、ですね

母親 ええ

間。

先生、制服を見つけて

先生 制服……

母親 クリーニングしたんです

先生 あ、そうですか

母親 はい

母親、お茶を持ってきて、

母親 先生、どうぞ

先生 どうも、

母親 お呑みください

先生 ありがとうございます

先生、お茶を飲む。

母親 ……いいですよね、お茶は

先生 はい？

母親 落ち着きます

先生 ああ、確かに

母親 ええ

先生 ……では、

母親 ですね、お話します

先生 お願いします

母親 や、私も、びっくりしたんやけど

先生 はい

母親 あの子がおったんです

先生 ……え？

母親 はい

先生 どこに？

母親 ここ、真っ直ぐに進むと、踏切があるでしょう？

先生 ああ、駅前の

母親 そこです

先生 何か、お話されました？

母親 いえ、私、電車に乗っちゃったもんやから

先生 え？

母親 はい

先生 あ、電車の、車内から、あの子を？
母親 はい、そうです
先生 どんな格好でした？
母親 それがね、おかしいんですけど、
先生 はい
母親 この、制服を着てて
先生 ……
母親 あれ、先生
先生 はい？
母親 疑ってます？
先生 いやいや、そんなことは、まあ
母親 はい
先生 ただ、十年以上、経つので
母親 おかしいですか？
先生 はい？
母親 私
先生 や、私も、信じたのですが、
母親 確かに、あの子やったんです
先生 ……はい
母親 もう一度、探してくださいませんか？
先生 私に出来ることは、もちろん
母親 ありがとうございます
先生 同級生にも、心当たりないか聞いてみますね
母親 助かります

先生 はい、何か分かったら、連絡しますので
母親 よろしくお願いいたします
母親、深く深く頭を下げる。
■三十一歳、十二月
君島の家。
一人でパソコンに向かっている君島。
声 すみませーん
君島 はい
声 郵便です
君島 あ、はいはい
そこに、星川がいる。
星川 サイン、お願いします
君島 あ、はい
星川 ん
君島 ……
星川 君島、くん？
君島 はい

星川 あ、同じクラスだった
君島 ああ
星川 星川
君島 星川、くん
星川 そうです
君島 うわあ
星川 久しぶり、だね
君島 うん
星川 部屋、汚いね
君島 うん
星川 わー、びっくりした
君島 びっくりだね、じゃっ
星川 ちよっとちよっと
君島 え？
星川 久しぶりなのに、それだけ？
君島 ああ
星川 何かもっと、話すことあるでしょ？
君島 そうだね

間。長い間。

星川 ……意外と、難しいね
君島 そう、ね
星川 あ、同窓会行く？

君島 え、同窓会？
星川 そう、フェイスブックのやつ
君島 あー
星川 (何かを察して) あー
君島 あー、うん、同窓会
星川 同窓会
君島 どうしようかなあ
星川 ごめんね
君島 え、なんで謝るの？
星川 いや
君島 全然大丈夫だけど、
星川 ああ、うん
君島 迷ってるね、参加するか
星川 フェイスブック、は、やってる？
君島 僕？
星川 うん
君島 やってるやってる
星川 友達申請していい？
君島 え、いいの？
星川 や、折角だし
君島 ありがとう
星川 ううん
君島 ありがとう
星川 あ、知ってる？ 片岡と倉木

君島 え？

星川 あ、やっぱいいや

君島 何何？

星川 俺のフェイスブックから行けるから、

見てみるといいよ

君島 はあ

星川 うん、じゃあ、また

君島 また

星川 はい

星川、帰る。

君島、その郵便を開ける。

なかにある紙を見て、捨てる。

そのまま横になる。

君島 くそっ

そして意味もなく、携帯を見る。

一方。

レストランにいる、片岡と倉木。

片岡 ん

倉木 ん？

片岡 うん

倉木 うん、ってなに？

片岡 まあまあ

倉木 プレゼント？

片岡 そんなもん

倉木 へー、珍しいね

片岡 開けてみて

倉木 なんだろー

指輪が出てくる。

それを見て、動かなくなる倉木。

倉木 ……

片岡 そのさ、約束、しようかと、思って

倉木 ……

片岡 有美？

倉木 うん

片岡 聞ってる？

倉木 ……続けて

片岡 だから、俺と、結婚してください

倉木、ぼろぼろと泣いて

倉木 はい

片岡 うん

倉木に指輪をつける、片岡。

片岡 ……お代わり、いる？

倉木 いる

片岡 すみませーん、同じの、もう一つずつ

倉木 ありがとう

片岡 ううん

間。

片岡 意外と、言えないのな

倉木 ん？

片岡 や、結構、考えてきたんだけど

倉木 言葉？

片岡 そう

倉木 へえー

片岡 うん

倉木 どのなの？

片岡 え？

倉木 どのなの、考えてきたの？

片岡 まあ

倉木 教えて

片岡 えー

倉木 教えてよ

片岡 いいよ、恥ずかしい

倉木 恥ずかしくないよ

片岡 ……

倉木 ぜんぶ嬉しいもん

片岡 いやあ

倉木 同じ名字に、なるんですね

片岡 そうす、ね

倉木 うん

間。

倉木 絶対忘れないなあ

片岡 ん？

倉木 今日、この日

片岡 ああー

倉木 うん

片岡 てか、大丈夫だった？

倉木 何が？

片岡 や、さ、

倉木 大丈夫だよ

片岡 ああ

倉木 うん、大丈夫

片岡 良かった

倉木 片岡か

片岡 名前？

倉木 ん、あれ、「片岡か」って下から読んでも……

二人 かたおかか？

倉木 すごーい

片岡 や、違う、かかお、たか

倉木 かかおたかって

片岡 チョコ作るのめっちゃ大変、みたいな

倉木 ん？

片岡 や、だから、チョコレートのカカオが

倉木 ああ、高い？

片岡 そう、カカオ高

倉木 おもしろーい

片岡 真顔で、お前

倉木 面白いね

片岡 やめろ

倉木 ずっと、こーしてようね

片岡 ……お代わり、遅くない？

倉木 照れ屋だなー

片岡 うっせえ、(店員を呼ぶ) すみませーん

君島の家。

君島 相変わらず、リア充してんな

ファック。

いや、ファックしてんのか、クソめ……

突然の着信。

君島 わ、ええ、はい

佐藤 もしもし？

君島 もしもし

佐藤 君島くん？

君島 あ、そうですけど

佐藤 佐藤です

君島 あー、えっと、

佐藤 同じクラスだった、覚えてないかな？

君島 覚え、てる

佐藤 良かった

君島 え、どしたの？

佐藤 君島くんって、同窓会来る？

君島 あー、えっと

佐藤 ちょっと聞きたいことあるんだよね

君島 え？

佐藤 あの子のことについて

君島 ……あの子？

佐藤 そう

君島 あの子が、どうしたの？

佐藤 や、ね、

君島 うん

佐藤 会ってから、話したい

君島 ……分かった

佐藤 うん、また

君島 また

電話が切れる。

■三十一歳、一月

同窓会、当日。

星川 (電話している) あー、はい、もしもし、

うん、今ついたよ、え、そうなの？

了解、揃ったら向かいます、はい、はい

そこに、君島やって来て

星川 あ、君島くーん

君島 おお

星川 この間ぶりー

君島 だね

星川 良かった、来てくれて

君島 や、迷ったんだけど

星川 うん？

君島 佐藤さんから連絡あって

星川 佐藤さん？

君島 うん

星川 あー、佐藤さん

君島 それで

星川 ん、佐藤さんのことが、好き？

君島 いやいや

星川 じゃ佐藤さんが、君のこと、好き？

君島 や、ないない

星川 だって、連絡あるのおかしくない？

君島 や、それは、

星川 ん？

君島 佐藤さんが、話してくれると思うよ

星川 はあ

そこに、佐藤がやってきて、

佐藤 ああ、いたいた

星川 え？

佐藤 久しぶりー

君島 あ、えーと

佐藤 佐藤です
君島 ……え
星川 うえー！
佐藤 はい
星川 全然、全然印象違う！
君島 うん
佐藤 そうかなあ
星川 や、キレイになったね
佐藤 どうも
星川 良いなあ、君島くん
佐藤 ん？
君島 や、何でもない
佐藤 そう？
君島 あ、他のみんなは？
星川 そうだ、片岡、もう店に入ってるって
君島 そっか
星川 ご婦人も一緒だそうです
佐藤 ご婦人？
君島 倉木さん
佐藤 ああ、ん？
星川 じゃ、向かいますか
君島 はい
佐藤 え、片岡と倉木って
星川 あれ、フェイスブック見てない？

佐藤 全然知らなかった……

■三時間後

二次会のカラオケボックス、のトイレ。
君島が一人でいる。
そこに、タケルがやってくる。
タケル よっ！
君島 え？
タケル 久しぶりー
君島 なんだ、お前か
タケル お前って
君島 久しぶりに見たなあ
タケル ……どうすか？
君島 え？
タケル 久しぶりの、同窓会は？
君島 ……
タケル 嫌な奴
君島 はははは
タケル クソが
君島 変わればええのに

君島 変われませんか
タケル 変われないから、お前がいるわけで
君島 うん
タケル で、あの子は？
君島 まだ聞いてない
タケル えー
君島 うん
タケル そのために来たんやろ？
君島 まあね
タケル なら
君島 戻ったら、聞いてみるわ
タケル そうしな
君島 うん
タケル あとさ、
君島 ん？
タケル 書けよ、続き
君島 んー
タケル 俺、待ってんだぞ
君島 分かったよ
タケル 約束な

タケル、行く。

入れ違いに、片岡入ってきて、

片岡 おお
君島 わ
片岡 君島か
君島 うん
片岡 酔った？
君島 や、全然
片岡 え、じゃあ、何してたの
君島 あ
片岡 ん？
君島 うん、こ
片岡 うんこかよ！
君島 ごめんごめん
片岡 や、いいんだけどさ
君島 うん
片岡 てか、星川ベロベロで
君島 あー
片岡 起こすの、手伝ってくんね？
君島 分かった

部屋に戻ってくる、二人。

片岡 ただいまー
倉木 おかえりー

片岡 うっす
佐藤 遅かったね
君島 あ、ごめん
片岡 星川、起きろー
星川 うう、うううう
片岡 んだよ
倉木 もういいよ、寝かしとこう？
片岡 んー
君島 佐藤さん
佐藤 ん？
君島 電話のことなんだけど
佐藤 ああー
倉木 何、電話って
君島 あの子について
倉木 え
君島 聞きたいことが、あるって
佐藤 うん
片岡 え、何？
佐藤 や、あんまり、信じられないんだけど
君島 うん
佐藤 あの子を見かけた人がいて
倉木 え？
君島 どういうこと？
佐藤 うん

片岡 何、誰が見たの？
佐藤 あの子の、お母さん
片岡 あー
君島 ……
片岡 それは、どうかな
倉木 うん
佐藤 でも、もしかしたら、もしかするから、
みんな何か、知らないかなあって
倉木 私、知らない
片岡 俺も
君島 僕、も
佐藤 そっか
君島 うん
片岡 どっかで、元気してんのかなあ
倉木 あの子？
片岡 うん
倉木 さあ、ねえ

間。

倉木 ……何か、歌おうかな
片岡 お
倉木 ちょっと待ってねー

デンモクをいじる倉木。

倉木 送信

歌。夏祭り。

間奏に。

片岡 いやいや、(歌詞が) 狙いすぎだろ

倉木 いいの！

片岡 は？

倉木 みんなで歌おうよ！

佐藤 うん

みんなで歌う、が、その途中で、

星川 う、うう、うるせー！！！！

片岡 あ、星川

星川 あっ、頭ガンガンするから、ちょっと静かにして

倉木 ごめんごめん

星川 ううう

佐藤 ね、星川くん

星川 ん？

佐藤 あの子について、聞きたいことがあるんだけど

星川 あの子？

佐藤 そう

星川 ああ、あのビッチ？

君島 え？

片岡 何言ってんだ、お前

星川 あれ、みんな知らない？

倉木 何？

星川 あいつ、売春してたぜ

片岡 ……は？

佐藤 星川くん

君島 え

倉木 どういうこと？

星川 俺、塾帰りに、あの子、見てさ

一人で、ホテルから出て来たの、あの子

すまーした顔で、制服のまま、

俺、思わず話しかけちゃった、そしたら、

そう言ったの？

君島 ん

君島 あの子が、そう言ったの？

星川 まあ

君島 嘘つけよ、おい

星川 本当だよ

君島 は？

星川 (笑う) てか、俺、聞いちゃった、

誰でもいいの？って

あの子、いいよって、別に、星川くんでも、って
だからさ、俺……

気づくと、あの子の幻影が立っている。

制服を着ているあの子。

君島と目が合う。

音楽だけが響いている。暗転。

再び、中学生時代。

修学旅行の夜。

暗い部屋に寝転ぶ男子たち。

タケル な、な

片岡 何？

タケル もう寝た？

星川 寝てなーい

片岡 よっしゃ、起きよ

タケル おう

■中学三年生、九月

一同、布団にくるまりながら、

片岡 あれ、君島は？

タケル 寝てるね

片岡 そっか

星川 良いよね

片岡 ん？

星川 俺、今、すげえワクワクしてる

片岡 この状況？

星川 うん

タケル わかる
片岡 わかる
星川 楽しい
タケル ねえ、
片岡 ん？
タケル 好きな人いる？
一同、笑う。
片岡 いやいや、早い早い
星川 定番だけど
タケル 好きな人、いる？
片岡 二回言うな
タケル 気になるじゃん、だって
星川 俺はねー、
片岡 おっ
星川 内緒
片岡 内緒かよ
タケル 片岡は、倉木だもんな
片岡 ちよつと
星川 ね
片岡 もー、やめろってそういうの
タケル 恥ずかしいの？
片岡 言いたくねえわ

星川 羨ましいなあ、彼女
タケル ね
片岡 そっちは？ 好きな人
タケル 俺は、あの子
星川 出た
片岡 出た
星川 ちよつと待った
タケル え？
星川 私もです
片岡 出たー！
タケル よろしくお願いします！
星川 よろしくお願いします！
片岡 じゃあ、星川さんで
星川 大どんでん返し！
タケル 馬鹿やろう
と、そこに、女子の声。
倉木 男子ー
星川 え
タケル うわ、まじか
倉木 起きてるー？
片岡 おお
星川 お呼びですよ

タケル 全く、今どきの女子は
星川 けしからんですな
倉木 入ってもいい？
片岡 どぞー

倉木とあの子が入ってくる。

あの子 お邪魔しまーす
タケル どうぞどうぞ
片岡 てか、先生は？
倉木 大丈夫
片岡 本当に？
倉木 うん
あの子 男子の部屋、ちょっと広いね
星川 え、本当に？
あの子 うん、ちょっとだけ
星川 そうなんだ
タケル ラッキー
片岡 あのさ、
倉木 ん？
片岡 何か用？
倉木 ん、特に用事は、ないんだけど
片岡 ああ
倉木 ごめん、迷惑だった？

片岡 や、んなことねーけど
倉木 そう
タケル じゃあ、トランプする？
星川 え、持ってきてんの？
タケル いや、無いけど
星川 は？
タケル エアで
星川 出来るか
倉木 ね、片岡
片岡 ん？
倉木 ちょっといい？
片岡 ああ
倉木 ごめんね
タケル ひゆうひゆう
星川 あっつい、今日あっつい
片岡 うるさいな
倉木 じゃあ、行こう
片岡 うん

抜け出す二人。

星川 行ってらっしゃい！
タケル お幸せにー！！
星川 ははは

あの子 片岡くんって、モテるよね

星川 うん、まあ

タケル モテるなあ

あの子 ねー

タケル え、何？ 片岡派？

あの子 や、そういうのじゃないけど

星川 けど？

あの子 お似合いだなあ、って

星川 はいはい

タケル お似合いですねえ

あの子 うん

タケル え、好きな人いるの？

星川 うわ、直球！

あの子 えー

タケル 教えてよ

あの子 んー、内緒

タケル 内緒かい！

星川 でもでも内緒ってことは、

あの子 そういうことになってきますけどねえ

いやいや

そこに、先生が来て

先生 おーい、何時だと思ってるんだ？

生徒たち ……

先生 外まで、聞こえてたぞ

星川 すみません

先生 早く寝ろ、いいなー？

タケル はい

先生 おやすみ

星川 おやすみなさい

消える、電気。

佐藤 修学旅行の、夜。

私は一人で、その部屋にいた。

オレンジ色の明かりがともった部屋で、

みんなの帰りを待っていた。

すごいなあ。

よく、その行動が選べるなあ、と思う。

いつか、この思い出が、

卒業アルバムという本になったとき。

私のことを思い出す人はいるんだろうか。

みんなの顔が、同じ大きさと並んでる。

その中に、私もいる。

突然、そのことが、申し訳なくなる。

ごめんなさい。

みんなと同じ大きさと、ごめんなさい。

私は、背景だから。

小さいコマで大丈夫です。だけど、

どうしても、思ってしまう。

いいなあ、って思ってしまう。

あの子は、いつも中心にいた。

突然、みんなの前に現れた。

■中学三年生、五月

チャイムの音。

片岡 起立、気をつけ、礼

生徒たち おはようございます！

片岡 着席

教室の光景。

星川 はー、眠っ……

倉木 ねえ、数学の宿題やった？

片岡 当然

倉木 え、ちよつと見せて

片岡 嫌だよ、自分でやれ

倉木 そんなこと言わずにさ

片岡 星川は？

星川 もちろん

倉木 やば、私だけじゃん

星川 まあ、やったんだけどね、

片岡 ん？

星川 家に忘れた

片岡 何だそれ

倉木 本当に？

星川 うん、本当本当

佐藤 (黒板消しクリナーの音) ブイーン

倉木 や、絶対嘘でしょ

星川 本当だって

佐藤 ブイーン

片岡 じゃあ、どんな問題あったか覚えてる？

星川 えーと

片岡 5、4、3、

星川 ちよ、ちよつと待って

片岡 2、1

星川 三角形の

片岡 はい、アウトー！

倉木 やってないな

星川 や、本当にやったんだって！

佐藤 ブイーン

机に突っ伏している君島。

片岡 じゃさ、家に帰って取ってこいよ

星川 取ってきたいけどねえ

片岡 は？

星川 遠いんですよ、家が

片岡 お前、正直に言え

星川 本当、本当に

倉木 片岡お願い！見して！

片岡 嫌だっけ言っただら

倉木 一生のお願い！

片岡 何回使っただ、一生のお願い

倉木 今回は本当に！

めっちゃ怖いじゃん、細川

片岡 そんなに困っただら

倉木 ん？

片岡 君島に聞いてみれば？

倉木 もー

片岡 ほらほら

倉木 またすぐ意地悪言っ

片岡 や、別に意地悪じゃねえじゃん

な、君島？

君島 ……

星川 寝てんのかな？

片岡 さあ

先生、やってきて

先生 はい、席つけー

生徒たち はい

先生 えー、今日は、嬉しいお知らせがある。

何と、このクラスに、転校生がやってくる！

生徒たち ええ！

先生 はい、入ってきなさい

あの子 失礼します

あの子の、声だけが聞こえる。

あの子 ……はじめまして、

えっと、このクラスに、転校することになりました、

とても、緊張していますが、よろしく、お願いします

一同、拍手。

あの子 ありがとうございます

先生 それじゃあ、空いている席に

君島だけが残る。前の席を見て、

君島

この、背中が好きだった。
無防備な背中。

下着がうっすらと透けている。

無防備な背中。

僕は信じられている。

あの子は僕を信じている。

無防備な背中。

その気になれば、

僕が握っているペンは、

あの子を簡単に傷つけることができる。

一瞬その光景がよぎる。

が、僕は何もしない。

無防備な背中。

首元を見る。

うっすらと毛が生えている。

あの子の耳。

あの子の耳の裏。

こんな形をしていたんだ。

ぜんぶ愛しい。

無防備な背中。

きつとこの背中を、

愛する人が現れる。

きれいだね、なんて言って、

その人は、この背中を、
優しく撫でるんだろう。

そしたら、この子は、

細い腕をまっすぐに伸ばし、

その人の背中に絡まる。

表面と表面がくっついて、

体温と呼吸が混ざる。混ざる。

夜中。

世界がまるで、その部屋だけ、

くっきりと切り取られたように。

浮かぶ。

この日のために生まれてきた。

この日のために生まれてきたんだ、

なんて、思うのかもしれない。

混ざってゆく。

二つが一つになる。

ここだけが世界になる。

やがて、車の音が聴こえてきて、

ゆっくりと目を覚ます。

少し笑う。

カーテンが開く。

それでも。

いつか、そんな日が来るとしても、

今、この耳の裏を見ているのは、

僕だ。

世界で僕だけだ。

僕は何度も、何度も想像する。

決して手が届かない、

その景色を想像する。

■中学三年生、六月

片岡

正直に言うと。

俺は、その席がうらやましかった。

君島の席が、うらやましかった。

倉木にまだ、話していないことがある。

俺は、あの子のことが好きだった。

放課後、教室で。

あの子

ごめんなさい

片岡

……

あの子

気持ちは、とても嬉しいです

片岡

なんで？

あの子

はい？

片岡

なんで、ダメだったのかな？

あの子

理由は、ないです

片岡　　ないの？

あの子　　はい

片岡　　じゃあ、

あの子　　付き合う理由も、ないです

片岡　　……

あの子　　はい

片岡　　そっか

あの子　　ごめんなさい

片岡　　いやいや、ごめんね

あの子　　ううん

片岡　　伝えられて、良かったです

あの子　　はい

片岡　　それじゃあ

一人になる片岡。そこに、

倉木　　片岡ー

片岡　　おお

倉木　　一緒帰ろ

片岡　　はいはい

二人、少し歩いて

倉木　　んふふー

片岡 え？

倉木 やって見たかったんだ、こういうの

片岡 ああ、一緒に帰る、みたいなの？

倉木 そーそー

片岡 ああねえ

倉木 え、テンション低くない？

片岡 んなことねーけど

倉木 嫌？

片岡 え？

倉木 嫌なんか

片岡 や

二人 んなことねーけどお

片岡 ……

倉木 んなことねーけど率、高いね

片岡 やめろ

倉木 ん

しばし、無言。

倉木 片岡ってさあ、

片岡 あ？

倉木 意外と照れ屋？

片岡 ……

倉木 だよねえ

片岡 うっせ

倉木 そうなんだよねえ……

片岡 何笑ってんの？

倉木 や、なんかね

片岡 ん？

倉木 なんかに、嬉しくて

片岡 はあ

倉木 やー、増えてくんだなあ

片岡 え？

倉木 知らない片岡が

片岡 なんだそれ

倉木 あ、最初に言っとくわ

片岡 ん？

倉木 嫌いになったら、すぐ言っただろ？

片岡 ……

倉木 あと、他に好きな人が、出来ても

片岡 はあ

倉木 約束

片岡 まあ、うん

倉木 てか、私、多分分かるし、そんなとき

片岡 ねーよ

倉木 え？

片岡 そんなん、ねーよ

倉木 ……ちよ、もう一回、言っただろ？

片岡 だから、

倉木 え？

片岡 や、もういい

倉木 えー??

片岡 んだよ、帰っぞ

倉木 待つてよ

片岡、倉木がいたところへ、

片岡 倉木、ごめんな、ごめんなさい！

実は、指輪を買うとき、

あの子が、あの子の顔が、一瞬頭をよぎった。
どうしても想像してしまう、

あの日、あの子が受け止めてくれたら、

どんな未来が待つてたんだろう、つて。

俺は、倉木と、結婚する。

そして、人並みに歳をとつて、

死ぬときには、子どもや孫が周りにいて、

「おじいちゃん、大丈夫？」つて

「おじいちゃん、死なないで」つて、

周りが泣いてるから、俺は笑つて、

「ありがとう」つて言つて、

そんな幸せの、絵に描いたような幸せの中、

俺の頭の中には、きっとあの子がいる。

あの日、手が届かなかった俺が、

どうしようもなく、そこにいる。

全部言い訳です、全部全部言い訳です、

ごめんなさいね、

だけど、頭と心と下半身がバラバラだから、

みんな進みたい方向がバラバラだから、

どの道を進んだところできつと後悔する。

やがて、後悔することも忘れて、

その責任を誰かになすりつけて、

死んだように生きるのは、絶対に、嫌だ。

ごめんな、倉木。こんな俺で、ごめんな。

■中学三年生、九月

教室にて。

あの子 ねえ

佐藤 ん

あの子 どうしたの？

佐藤 どうしたの、つて？

あの子 その、目

佐藤 目？

あの子 うん

佐藤 え、私の目、変？

あの子 じゃなくて

佐藤 ん？

あの子 ちょっと、見せて

あの子、佐藤の瞳を見て、

あの子 やっぱり

佐藤 え、何？

あの子 佐藤さん、すごく綺麗

佐藤 私？

あの子 うん

佐藤 え、いやいやいや

あの子 そらさないで

佐藤 え？

あの子 ちゃんと、見たい

佐藤 ……

二人、目を、合わせたまま

あの子 うん、うんうん

佐藤 何？

あの子 佐藤さん、ね

佐藤 はい

あの子 いつも、その目してるんだ

佐藤 え？

あの子 真っ直ぐな、目

佐藤 はあ

あの子 その目で、よく、私のこと見てる

佐藤 ……

あの子 あれ、違った？

佐藤 あ、違う、というか

あの子 うん

佐藤 ……見てる、かもしれませぬ

あの子 だよ？

佐藤 はい

あの子 どうして？

佐藤 どうして、というか

あの子 うん

佐藤 あ、あんまり見ないでください

あの子 え？

佐藤 私、ブスだから

あの子 そんなことないよ

佐藤 私は、

あの子 うん？

佐藤 あなたみたいに、なりたいたいです

あの子 私？

佐藤 はい

あの子 奇遇だね

佐藤 え？

あの子 私も、あなたみたいになりたい

佐藤 え、いやいやいや

あの子 本当に

佐藤 ……

あの子 こっち、きて？

二人、向き合う。

あの子、佐藤を抱きしめる。

佐藤 あの、

あの子 あの、ね

佐藤 はい

あの子 理由は、ないんだけど、

佐藤 はい

あの子 こうしたくなったの

佐藤 はい

あの子 ねえ、

佐藤 はい？

あの子 私みたいにならなりたいならさ

佐藤 ……

あの子 なる？

佐藤 え？

あの子 私に

二人の、目が合う。

■中学三年生、十月

運動会の放送。

君島

これで、午前の部のプログラムは、全て終了です。

今から、昼食の時間です。

午後のプログラムは、一時三十五分から、始まります。

お弁当の時間。

母親が一人現れる。

あの子はそこにいない。

その声は、母親にのみ聞こえている。

母親 おーい、こっちで

あの子 (お母さん)

母親 よう頑張ったなあ

あの子 (ううん)

母親 さ、お弁当作ったけん、食べよ

あの子 (ありがとう、いただきます)

母親 どう？
あの子 (唐揚げ、美味しい)
母親 本当？
あの子 (うん)
母親 昨日から漬け込んだじゃんけんなあ
あの子 (さすが)
母親 ふふ、ありがと
あの子 (もう一個食べていい？)
母親 何個でも、どうぞ
あの子 (やった)
倉木 (ねー)
あの子 (あ、倉木さん)
倉木 (もうご飯食べた？)
あの子 (あ、もうちょっと)
倉木 (終わったらさ、一緒遊ぼう)
あの子 (うん、分かった)
倉木 (待ってるね)
あの子 (はーい)
母親 友達なん？
あの子 (うん、倉木さん)
母親 良い子そうやなあ
あの子 (よく遊ぶんよ)
母親 そう
あの子 (うん、それじゃあ)

母親 もう行くん？
あの子 (お弁当ありがとう、美味しかった)
母親 行かんで
あの子 (え？)
母親 ……
あの子 (どうしたん、お母さん？)
母親 ……
あの子 (もう行かんと、ね？)
母親 そうやな
あの子 (うん)
母親 行ってらっしゃい
あの子 (行ってきます)
母親 一人残される。
■ 中学三年生、二月
もしものあの日、図書館に行けていたら。
タケル ささ、お二人さん、こっちこっち
あの子 こっち？
タケル そーそー
君島 ちょっと、タケル

タケル ン？
君島 図書館は？
タケル んなもん、後々！
君島 ええ？
タケル まずは腹ごしらえ、やる？
あの子 うん！
君島 いやいや
タケル 何食べたい？
あの子 クレープ
タケル よっしゃ、クレープ買おう！
あの子 はい、並んで、並んで、並んで、クレープ
タケル ありがとう
あの子 食べてみ？
あの子 おいしい
タケル やろ？
君島 僕のは？
タケル 分け合えばいいやん
君島 ええ？
あの子 食べる？
君島 ……食べる
あの子 はい
君島 うん
あの子 どう？
君島 ン、美味しい

あの子 ね
タケル ふふふ、じゃ、図書館行こか！
君島 うん
タケル ちゃんと掴まってな！
君島 え、何これ
タケル チャリ！
君島 チャリ！？
タケル おう
君島 え、チャリで行くの？
タケル 青春といえチャリやろ！ 出発！
あの子 おー！
タケル 坂道、行くで！
あの子 きゃー！
君島 わわわ
あの子 楽しい！
タケル はい、図書館着いた！
君島 ありがとう
あの子 入ろ？
君島 うん
図書館に入って。
あの子 私、
君島 うん

あの子 好きなんだ、この雰囲気

君島 僕も

あの子 やっぱり

君島 ん？

あの子 気が、合うね

君島 うん

あの子 君島くん

君島 はい

あの子 オススメの本、教えて？

君島 あ、そうだった、えーとね、

あの子 ……はい

君島 ありがとう

あの子 ううん

あの子 ちょっと、読んでもいい？

君島 どうぞ

本を開く、あの子。

その隣に座る、君島。

ゆっくりと時間が、流れる。

あの子 ……君島くん

君島 ん

あの子 好き

君島 あ

あの子 すごいね、この本

君島 ああ、うん

あの子 ありがとう

君島 良かった

あの子 お家で、じっくり読むね

君島 実は、

あの子 うん？

君島 僕、小説家になりたいんだ

あの子 えー！ すごいね

君島 ううん

あの子 じゃあさ、君島くんの本が出来たら

君島 うん

あの子 一番に、読ませてね

君島 分かった

あの子 約束

その手と手が、触れ合おうとした直前、

タケル はい、そこまで！

君島 ええー

タケル すみません、お時間ですので

君島 何だよ、もう

あの子は、もういない。

タケル ……なあ

君島 ん？

タケル いつまで、そこにおんねん

君島 何？

タケル 逃げんなよ

君島 逃げるって

タケル あの子と、ちゃんと向き合え

君島 ……

タケル いいな？

君島、何も言えずにそこにいる。

その背中を見ながら、タケルはいなくなる。

■ 中学三年生、十一月

先生、やって来て、

先生 教室は、お花畑だ。

いろんな形の、いろんな花が、咲いている。

私たちに出来ることは、

ただ、水をあげることだけ。

そして、変な虫がつかないよう、

じっと、見守ることだけ。

だから、咲いている花よりも、

もう少しで咲きそうな花が、気になってしまう。

佐藤、やって来る。

佐藤 先生ー

先生 おお、佐藤

佐藤 お疲れ様です

先生 どうした？

佐藤 ちょっと、相談したいことが、あって

先生 うん

佐藤 合唱コンクールについてなんですけど

先生 ほう

佐藤 リーダーになったから、

うまく出来るかが、すごい不安で

先生 そうか

佐藤 はい

先生 大丈夫、先生がついてるから

佐藤 ありがとうございます

先生 うん

佐藤 すごく、心強いです。

頼れるの、先生しかいないから、

先生 そうか？

佐藤 はい

先生 いいぞ、頼りにしなさい

佐藤 分かりました

先生 うん

佐藤 それじゃあ、また

先生 また

職員室を、離れて、

佐藤 あの子は、私に色んなことを、教えてくれた。

その場所が一番、権力のある人を味方にする事

おじさんという生き物は、

基本的に頼りたい、と思っっていること。

会話をするときには、自分で言葉を用意せずに、

その人がいるから生まれた言葉を大切にすること。

たかさんのことを学んだ。

そして、私はだんだん、あの子に近づいていった。

先生、現れて、

先生 好きだ

佐藤 え？

先生 佐藤、好きだ

佐藤 ……本気ですか？

先生 ああ

佐藤 先生と、生徒ですよ？

先生 待つよ

佐藤 ……

先生 うん、いくらでも、待つ

佐藤 先生

佐藤、ハグして

佐藤 ありがとうございます

先生 ううん

佐藤 すごく、嬉しいです

先生 佐藤

先生の背後に、あの子。

あの子 ね？

佐藤 うん

あの子 男の人から向けられる気持ちって

佐藤 すごく、気持ち悪くて、

あの子 すごく、気持ちいいでしょう？

佐藤 そうだね

あの子 うん

二人、まだ抱き合っている。

■中学三年生、十二月

帰り道で。

倉木 片岡

片岡 ん？

倉木 もうすぐ、クリスマスだね

片岡 そーだなー

倉木 何か欲しいものある？

片岡 俺？

倉木 うん

片岡 いやいや、大丈夫だよ

倉木 そう？

片岡 倉木は？

倉木 じゃ、私もいらなーい

片岡 遠慮すんなよ

倉木 遠慮するわ

片岡 んー

倉木、立ち止まり、

倉木 ね、

片岡 ん？

倉木 私の、どこが好き？

片岡 えー

倉木 教えてよ

片岡 いいよ、恥ずい

倉木 恥ずいって

片岡 うん

倉木 私はね、片岡の声が好き

片岡 ちょっ

倉木 あと、顔と、照れ屋さんなところ

片岡 どうも

倉木 部活してるときの真剣な目、

美味しいもの食べたときのリアクション

片岡 もういいよ

倉木 いいの？

片岡 うん、行こう？

片岡、先に行く。

倉木 甘いんだよなあ、

どこが好き？って聞いた時点で、

女子は不安なんだよ、片岡

……私、気づいてたよ、ずっと

だけど、見て見ぬふりしてた。

私は、あの子になれないから。

いないって、本当にずるい。

勝てないもん。

あの子の影を、追いかけるあの人の、

背中をずっと見てきた。

背中だったらまだいい。

あの人は、時々、

私のことをまっすぐに見ながら、

あの子のことを想像した。

たぶん、本当。

聞いてないけど。

ずっと、あの人のことを見てきた、

私だから分かる。

そこを、誇ろうと思ったんだ。

私の、自慢にしようと思った。

だって、私、幸せだもん。

好きな人と結ばれて、

好きな人は私と、約束をしてくれて。

時々、「なんで」って、

病気みたいに思っちゃうけど、

私、ちゃんと、幸せだから。

■ 中学三年生、一月

星川 俺は、母さんにお年玉を預けていた。

と言うか、半ば強制的に

「お母さんが預かってくからね」と、

お札が詰まったお年玉袋は、どこかに消えた。

そのカラクリに気づいた俺は、

自分でコツコツと貯金を始めた。

そのお金を、あの子に渡した。

あの子がいる。

あの子 ありがと

星川 うん

あの子 じゃ、しよっか

あの子が先に行く。

星川 あの子が、ホテルに入ってく。

狭い部屋に二人きり。

あの子は、俺のあの子は笑って、キスしてきた。

なんとも言えない気持ちになった。

もし俺が、根っからの悪人だったのなら、

その状況に、思いっきり没頭できたんだろう。

だけど、俺は悪人じゃなく、卑怯者だ。

あの子が笑っている。

なんとも言えない気持ちになる。

あとは、もう、何も考えずに、横になった。

「かわいそう」という言葉が浮かぶ。

どっちが。

俺とあの子、一体、どっちが。

あの子の影が動く。

自分で望んだことだろ、

良い子ぶってんじゃないよ、

浸れ、浸れ、浸れ、

部屋の暗さだけ、よく覚えてる。

俺は、ダメだった。

最後まで、捨て切れなかった。

あの子が、最後のキスをする。

体と体が離れる。

さよなら。

なんか泣けてきた。

自分勝手に、泣けてきた。

見ている君島。

君島　　なんで

あの子　ん？

君島　　なんで、そんなことするの？

あの子　理由いる？

君島　　いるだろ

あの子　じゃあさ、

君島　　ん？

あの子　それを、君に話す、理由いる？

君島　　……

あの子　どこが好きだった？

君島　　え？

あの子　私の

君島　　や、

あの子　ん？

君島　　そんなじゃないだろ

あの子　……

君島　　僕の知ってる、あの子は

あの子　そう？

君島　　誰？

あの子　……君島くんは、

君島　　ん？

あの子　思い出を、大切にしたいんだねえ

君島　　……

あの子　だけど、思い出ってさ、

君島　　勝手にキレイになっただけでしょ？

君島　　まあ

あの子 私、そう言うの、嫌いなんだ
その中に、閉じ込められてるみたいで
君島 だから？
あの子 え？
君島 だから、星川とやったの？
あの子 ー
君島 え、なんで
あの子 私ね、必要とされたいんだ
君島 は？
あの子 ね、私、必要だった？
君島 君島くんの人生に、必要だった？
君島 うん
あの子 どうして？
君島 ずっと、好きだったから
あの子 良かった
君島 え？
あの子 嬉しいなあ、
君島 私、誰かの心に住んでたいんだ、ずっと
君島 そっか
あの子 うん
君島 誰でも良かったんだ
あの子 そうかもね
君島 僕じゃ、なくても
あの子 うん

君島 ……ふざけんよ
あの子 ん？
君島 くそ、くそくそくそ！ くそ女！
あの子 君島くん？
君島 絶対忘れない！
あの子 僕は、君のこと、絶対忘れない！
君島 そう
あの子 幸せだったことも！ 苦しかったことも！
君島 全部、全部忘れない！書き残す！
一生、忘れないように、言葉にして、
閉じ込めてやる、僕の、心に！
あの子 うん
君島 君は死ねない、あの子は、死ねない、
僕の、物語の中を、生き続ける、ずっと！
あの子 すごいね、それが出来たら
君島 だから、もう一度
あの子 うん？
君島 ……笑ってください
あの子、笑う。君島、見ている。
歌。素晴らしい愛をもう一度。
合唱終わり、暗転。

■いつか

その教室を、母親が訪れる。

そこには、あの子がいた、痕跡がある。

その中を、歩いてゆく母親。

ふと、黒板を見ると、言葉が並んでいる。

【あの子は、きれい。】

【あの子は、意外とよく笑う。】

【あの子は、負けず嫌い。】

【あの子は、からあげが好き。】

【あの子は、素敵な声。】

【あの子は、本をよく読む。】

それを見て、立ち止まる母親。

その文字を、眺めている。

あの子が、その様子を後ろから見ている。
間。

タケル、現れて

タケル よっ！

あの子 わ！

タケル 良かったな

あの子 びっくりしたー

タケル うん

あの子 え、誰ですか？

タケル タケル

あの子 はあ

タケル そっちは？

あの子 あの子

タケル あの子かあ

あの子 うん

タケル なあ、あの子

あの子 ん？

タケル ……遊ぼっか

あの子 いいの？

タケル うん

あの子 一緒に？

タケル うん、一緒に

あの子 何して遊ぶ？

タケル 妖精を、見つけに行くとか

あの子 いるの？

タケル いるよ

あの子 えー

タケル やってみなきや分かんないだろ

あの子 そっかな

タケル うん

あの子 楽しそう

タケル じゃ、行こうか

あの子 うん

あの子、タケルと一緒に、どこかへ行く。

母親、チョークを拾い、

黒板の文字に一行、書き足す。

【あの子は、今も、生きている。】

おしまい。